

公開シンポジウム「現代宗教と対話の精神」報告

2009年11月7日、大正大学に於いて本研究所の公開シンポジウム「現代宗教と対話の精神」が開催された。“宗教をめぐる対話”という古くて新しいテーマは、オウム真理教事件や9.11同時多発テロをはじめとして、国内外において宗教が関わる事件が頻発している昨今の状況のなかで、ますます重要なものとなってきており、そうした背景のもとに、本シンポジウムは企画された。また、宗教間の対話の促進、及び学問世界やジャーナリズム、宗教界や一般社会の間の橋渡しということは、本研究所の基本理念のひとつであり、その意味で、本シンポジウムは、“宗教をめぐる対話”というテーマを通して、本研究所の1993年に再出発をしてからの（設立は1954年）15年の活動を振り返り、今後の指針を探る機会でもあった。



そこで今回は、各分野で対話実践の現場に携わってこられた下記の方々に登壇いただき、それぞれの立場から御発表いただいた。

報告

- ・金子 昭（天理大学おやさと研究所教授）
「宗教対話は開かれた「他流試合」で
—宗教人間学からの提言—」
- ・杉谷義純（大正大学理事長・前世界宗教者
平和会議日本委員会事務総長）
「世界の諸宗教対話の潮流と日本宗教者」
- ・田中恆清（石清水八幡宮宮司・神社本庁副

総長・京都府神社庁庁長）

「日本人の信仰の源流 —神も仏も—」

・ムケンゲシャイ・マタタ（オリエンズ宗教

研究所所長）

「出会いから始まる対話と諸宗教の神学」

・本山一博（玉光神社権宮司）

「宗教的探究としての宗教対話
—新体験主義—」

コメンテーター

・近藤光博（日本女子大学准教授）

司会

・島藺 進（東京大学教授・国際宗教研究所
所長）



金子昭氏

最初の発表者である金子氏は、対話をするのは、進むべき道を模索しながら悩み、それらをぶつけ合う“人間”であり、宗教者もまたそうした“人間”であること、したがって、“開かれた対話”は宗教にこそ最も必要であって、それを欠いたならば、宗教が特定の価値観に閉じ込められて自家中毒を起し、ドグマティックになりやすく、カルト化する危険があることを指摘した。そして、宗教が多
元的な価値観がうずまく現実の中に自ら積極的に乗り出していきながら、対話によって常に自身を見つめ直し、刷新していくことの必要性を述べた。



杉谷義純氏

つづいて杉谷氏は、宗教間対話の取組の歴史をたどりつつ、現在は、互いの命を守りあう“Shared Security”という考え方が重視されていることを紹介した。そして、平和を阻害するのは宗教ではなく宗教者であるということ、また、宗教間対話は、各々の宗教が互いの教義、思想を学び合うだけでなく、平和などの実践上の共通テーマをめぐって活動していくところにその意義と進展の可能性があると、そして、互いが対等の立場で相手の考えに関心をもつといった対話の精神が何よりも重要であることなどを述べた。



田中恆清氏

田中氏は、すべての宗教は“平和と民族の平安”を共通の目標としているが、宗教を扱うのが人間であるということに様々な問題の根があるとし、宗教の本来の意義を実践の中で見直していくことの必要性を述べた。そして、対話には、お互いが、教団の代表としてではなく一人の宗教者として

行うことが重要であること、また、神職にある御自身の立場から、かつての日本の宗教的伝統であった神仏習合的なあり方を再び取り戻すことの必要性を述べ、氏が携わっている具体的実践について話をした。この伝統は神仏分離によって失われたのではなく、一般の人々のあいだでは、依然として“神も仏も”という感覚は生きており、むしろ宗教者の方が神仏分離政策によるある種のトラウマと言い得る“神か仏か”というあり方から脱し切れていないということであった。



ムケンゲシャイ・マタタ氏

マタタ氏は、宗教間対話においては、我々が意識的にも知識的にも宗教多元主義を前提としなければならないこと、そこにおいて実現する宗教同士の“出会い”、宗教や文化を異にする人間同士の“出会い”の重要性を、自らが長期にわたって携わっている世田谷宗教者懇話会の活動を紹介しながら述べた。懇話会が行う行事は、それが世界平和を願うという直接的な目的のための活動であるということのみならず、無宗教の人たちを含む、その場に集う様々な人たちの出会いと交流の場になっているところに意味があるということであった。



本山一博氏

本山氏は、宗教間対話に対して、自分の信仰上の体験を深めるといふ側面からのアプローチについて発表した。それは氏が“新体験主義”と名付けるものであるが、他宗教と出会った場合に、相手の宗教の教義がどのような体験に基づいているのかを探ろうとする態度であり、それによって自らの宗教体験を相対化しながら、自らの信仰を深めていく態度である。体験から教義を、教義から体験を見つめながら、自他の教義や体験の特殊性と普遍性を見極めようとする試みを、御自身の具体的実践に即して述べた。



近藤光博氏

以上のような各氏の発表を受けて、コメンテーターの近藤氏は、宗教対話の場と気運について総括的な視野から問題を整理した。宗教間の関係は、人類史というレベルで見れば融和の方向に推移していくと推測できるが、今日的には、世界各地で様々な宗教紛争が起こっているという現実がある。しかしそこで対立しているのは宗教それ自体で

はなく共同体であり、それゆえそれは広い意味での政治紛争である。しかし、それらの対立や紛争を彩っている宗教的な枠組みや通念は、人々の無意識レベルにまで浸みこんでおり、その意味で、宗教対話は必須かつ喫緊の課題である、ということであった。

以上のような発表やコメントを受けて、フロアからは、宗教者と非宗教者の間に対話（布教ではなく）は可能か、対話を拒否する相手あるいは対話に消極的な相手との対話についてはどのように考えているか、などの質問が提出され、活発な議論が展開された。

そしてシンポジウムをしめくくるにあたって、宗教をめぐる対話の実践の重要性、対話の進展には長い時間が必要であること、それゆえに対話の活動を粘り強く継続していくことの重要性が、あらためて確認された。

なお、シンポジウム後の懇親会では、2008年に逝去された脇本平也前理事長を偲ぶ催しも行われ、御長男の平之氏も来場された。生前の脇本先生と親交の深かった方々も多くご参加いただき、盛況のうちに幕を閉じた。

(文責 編集部)